

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2009 ～ 2012 年度

課題番号：21251007

研究課題名（和文） ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究

研究課題名（英文） International Joint Survey of the rGyalrongic Languages

研究代表者 長野 泰彦

(NAGANO YASUHIKO)

国立民族学博物館 名誉教授

研究者番号：50142013

研究成果の概要（和文）：

ギャロン語は、チベット・ビルマ諸語の複数の下位言語グループに亘る文法的特徴を兼ね備えた言語（繫聯言語）で、チベット・ビルマ諸語の歴史を探究する上で不可欠の研究対象である。本計画は、ギャロン語及びギャロン系言語群の語彙と形態統辞法を網羅的に記述し、より精緻なギャロン祖語を再構するとともに、そのデータベースを構築・公開することによって、チベット・ビルマ系諸言語の系統関係や下位分類を精密化することを目的としてスタートした。81のギャロン語方言を共通の400/1200語彙調査票により記述し、同時に文の基本構造が分かる200の例文を蒐集した。これらのデータベース整備を行い、調査結果をWEBの地図上で検索できるシステムを開発し、国立民族学博物館のDBとして公開する準備を行った。2013年8月に一般公開できる予定である。このDBとの関連において、各方言の音声・音韻Inventory及び語彙索引を、語彙と200例文の音声データとともに国立民族学博物館の調査報告として25年度内に刊行する。また、ギャロン系諸語が基層をなしている可能性が高い、未解読古文獻言語、シャンシュン語の構造解明のため、新シャンシュン語DB作成をも行い、比較研究を行った。これと関連して、北京の故宮博物院が所蔵する『川番譯語』を解析し、そのチベット字が表す言語がギャロン語であることを実証した。

研究成果の概要（英文）：

The rGyalrong and rGyalrongic languages are so-called link-languages which represent several grammatical features found in different sub-groups of Tibeto-Burman(TB) family, and are regarded as an indispensable research target for the TB history. This research project aimed at describing thoroughly the basic gloss and morphosyntax of the rGylarong dialects and rGyalrongic languages, reconstructing the proto-rGyalrong shapes more precisely and elaborating upon the genetic relations and sub-classification of the TB languages.

We have succeeded in collecting 400/1200 lexical items and 200 basic sentences for 81 rGyalrongic languages. Those results will be open to the general public through the National Museum of Ethnology's website after July 2013.

In this connection, we have demonstrated that the Tibetan characters written in the Chuan-fan I-yu kept at the Palace Museum at Beijing represent rGyalrong language.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	8,900,000	2,670,000	11,570,000
2010年度	11,600,000	3,480,000	15,080,000
2011年度	11,600,000	3,480,000	15,080,000
2012年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
年度			
総計	37,300,000	11,190,000	48,490,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ギャロン、ギャロン系、チベット・ビルマ、シャンシュン、形態統辞論

1. 研究開始当初の背景

チベット・ビルマ諸語は、中国・青海省、四川省、雲南省、チベット自治区、ヒマラヤ地域、インド東北部と西北部、パキスタン東北部にわたる広い地域に分布する言語グループである。19世紀後半に研究が始まり、当初は音節構造や声調などの観点から、大まかにシナ・チベット語族として括られていたが、Wolfenden (1929) *Outlines of Tibeto-Burman Linguistic Morphology*以降、漢語のグループとは切り離して、チベット・ビルマ諸語(研究者によっては語派)を立てるのが定説となっている。これら諸言語の共時的・通時的研究はこの80年間に長足の進歩を遂げ、Benedict (1972) *Sino-Tibetan: A Conspectus* 及び Matisoff (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman* はこの言語群の祖語の音形式を相当程度明確にしたと思われる。しかしながら、現段階は主要な言語の分析に基づいた系統関係の大枠が示されたに過ぎず、未解読の古文書言語や記述のなされていない言語が多数残っている。また、祖語の語彙形式を再構できない部分も多く、形態統辞法の再構に関しては試み自体が少ない。

この原因として、①チベット・ビルマ諸語を系統的に結びつける役割を持つ繫聯言語(例えば四川省西北部のギャロン語、雲南省南部とミャンマー北部のチンポー語)の記述が、語彙においても形態統辞法についても組織的に行われてこなかったことと、記述対象が代表的な一方言に限定されていたこと、②形態統辞法に関する網羅的なデータベースが存在しないこと、③急速に進む漢化のため、繫聯言語の話し手が激減していること、④従前の歴史言語学におけるもっとも洗練された方法論は「比較」であり、この言語群の歴史研究も主としてこれに拠っていたが、民族の接触と移動が頻繁に起こったチベット・ビルマ系諸言語にあっては「接触・基層」という視点を導入する必要があるが、この検

討が遅れていること、などが挙げられる。

2. 研究の目的

本研究計画では、上記のような状況を少しでも改善し、チベット・ビルマ系諸言語の歴史をより精緻に解明するため、次の5点を重点的に調査研究した。

- ① 繫聯言語として特に重要で、かつ、急速に漢化が進み、形態統辞法が失われつつある、中国四川省西北部に話されるギャロン系諸語につき集中的なフィールドワークを行い、この言語グループの特性に合わせた、共通の1200語語彙調査票と形態統辞法調査票を用いて、ギャロン語方言およびギャロン系9言語のデータをも羅的に集積する。この際、隣接する言語との接触・基層関係も併せて記述した。
- ② これをもとに、ギャロン系諸語の語彙と形態統辞法のデータベースを作成するとともに、WEBの地図上で該当する言語の語彙・形態統辞法を、音声データとともに検索できるシステムを構築し公開する。口承伝承データや歴史などの言語外事実も参照事項として重視した。
- ③ ギャロン系諸語が基層をなしていると考えられる、未解読古文書言語のひとつ、シャンシュン語の語彙形式と文法を解明するための資料を整した。

3. 研究の方法

本研究を次のような全体構想の下に実施した。

- ① 2009-2011年度は基本的にフィールドでの記述研究を集中的に行い、記述と音声資料を蓄積した。調査票は本研究計画の目的に沿って、ギャロン系諸語の特性に

- 合わせた、1200語の語彙調査票と200文からなる形態統辞法調査票を用いた。
- ② 2011年度からデータベース整備とWEB地図上にデータを落とし込み、それと音声資料をリンクさせるプログラム開発を行った。24年度は最終的にDBを公開する準備を行い、2013年夏に国立民族学博物館のWEBサイトで一般公開できる予定である。
 - ③ ギャロン系諸語が基層をなしている可能性が高い、未解読古文獻言語、シャンシュン語を解読し、文法を再構成するため、フィールドワークの結果と敦煌出土チベット文獻(古シャンシュン語:9世紀)及び再構されたシャンシュン語語彙(14世紀)の突合・比較を行った。
 - ④ 故宮博物院に蔵する『川番譯語』の表すチベット字が何語であるのかが長年議論されてきたが、本プロジェクトで蒐集したギャロン系諸語のデータから、それが実はギャロン語を写したものであることを証明した。

4. 研究成果

- ① フィールドでの記述研究を集中的に行い、記述と音声資料を蓄積した。調査票は本研究計画の目的に沿って、ギャロン系諸語の特性に合わせた、1200語の語彙調査票と200文からなる形態統辞法調査票を用いた。この結果、ギャロン語とギャロン系諸語81種のデータを、音声とともに蒐集できた。
- ② 2011年度からデータベース整備とWEB地図上にデータを落とし込み、それと音声資料をリンクさせるプログラム開発を行った。24年度は最終的にDBを公開する準備を行い、2013年夏に国立民族学博物館のWEBサイトで一般公開できる予定である。
- ③ ギャロン系諸語が基層をなしている可能性が高い、未解読古文獻言語、シャンシュン語を解読し、文法を再構成するため、フィールドワークの結果と敦煌出土チベット文獻(古シャンシュン語:9世紀)及び再構されたシャンシュン語語彙(14世紀)の突合・比較を行った。
- ④ 故宮博物院に蔵する『川番譯語』の表すチベット字が何語であるのかが長年議論されてきたが、本プロジェクトで蒐集したギャロン系諸語のデータから、それが実はギャロン語を写したものであることを証明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計22件)

- ① Yasuhiko Nagano, A preliminary note to the Gyarong color terms, *Tibetan Studies in Honor of Samten Karmay*, 査読なし 2009 pp. 99-106
- ② Hiroyuki Suzuki, Preliminary Analysis of the Phonological History of Melung Tibetan, *LANGUAGE AND LINGUISTICS*, 査読あり 2009 10(3): 521-537.
- ③ 鈴木博之、ニャロン・ムニャ(新龍木雅)語甲拉西 [rGyarwagshis] 方言概況、査読あり、アジア言語論叢 2010 8: 1-28
- ④ Satoko Shirai, Perfect construction with existential verbs in nDrapa, 査読あり 2010 *Himalayan Linguistics* 9(1):101-122.
- ⑤ 鈴木博之 ヒヤルチベット語松潘・大寨方言の音声分析、査読あり、2010 アジアアフリカの言語と言語学 5巻
- ⑥ 鈴木博之 チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の多義性とその実態、査読あり、2011 言語研究 140: 147-158.
- ⑦ 鈴木博之 Deux remarques supplémentaires à propos du développement du ra-btagsen tibétain parlé、査読あり 2011 *Revue d'étude tibétaine* 20: 123-133.
- ⑧ 鈴木博之 嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源、査読あり 2011 語言暨語言學 12(2): 477-500.
- ⑨ 菊澤律子 On the development of applicative constructions in Austronesian languages、査読あり 2011 国立民族学博物館研究報告 36(4): 1-43.
- ⑩ 菊澤律子 標準語化と言語の消滅—地域言語の言語学的特徴とその歴史言語学的研究における役割、査読あり、2011 『マダガスカル地域文化の動態』 pp. 75-100.
- ⑪ 白井聡子 ダパ語における文の下位分類、査読あり、『チベット=ビルマ系言語の文法現象』 2013 pp. 391-421
- ⑫ 白井聡子 Mermaid construction in nDrapa、査読あり、*Adnominal clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of nouns*, 2013 pp. 341-370.
- ⑬ Tsuguhito Takeuchi, Formation and reformation of Old Tibetan, 査読あり *Historical Development of the Tibetan Languages". Journal of Research Institute* 2013 vol. 49 pp. 3-17.
- ⑭ Tsuguhito Takeuchi, Old Tibetan Buddhist

Texts from post- Tibetan Empire Period (mid 9th to late 10th centuries), 査読あり、*Old Tibetan Studies: Proceedings of the 10th Seminar of the International Association for Tibetan Studies 2012* pp. 205- 215

- ⑮ Tsuguhito Takeuchi, Old Tibetan Rock Inscriptions near Alchi, 査読あり *Historical Development of the Tibetan Languages. Journal of Research Institute*, 2012 49: 29- 69
- ⑯ 鈴木博之、迪慶州香格里拉県中央域カムチベット語の方言特徴、査読なし ニダバ 2012 41: 61- 70
- ⑰ 鈴木博之、カムチベット語Sangdam方言の音声分析とその方言特徴、査読あり アジア・アフリカ言語文化研究 2012 83: 37- 58
- ⑱ 鈴木博之、新龍木雅語中帯方向前綴的判断動詞、査読あり 2012 言語學論叢 45: 247- 262
- ⑲ Hiroyuki Suzuki, A propos du terme 'riz' et de l' hypothese du groupe dialectal Sems- kyi- nyila en tibetain du Khams, 査読あり、2012 *Revue d' etude tibetaine*, 23: 107- 115.
- ⑳ Hiroyuki Suzuki, Ergative marking in Nyagrong- Minyag (Xinlong, Sichuan). 査読あり 2012 *Linguistics of the Tibeto- Burman Area*, 35(1): 35- 48
- ㉑ 鈴木博之、カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴、査読あり、2012 国立民族学博物館研究報告 37(1): 53- 90
- ㉒ Hiroyuki Suzuki, Multiple usages of the verb snang in Gagatang Tibetan (Weixi, Yunnan), 査読あり、*Himalayan Linguistics* 2012 11(1): 1- 16

[学会発表] (計 15 件)

- ① Hiroyuki Suzuki, "Endangered dialects" in Tibetan: a case of Eastern Khams vernaculars., 16th Congress of IUAES, Kunming University, July 2009.
- ② Hiroyuki Suzuki, Typological characteristics of the Rongbrag dialect of Khmas, 12th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, University of British Columbia, August 2010.
- ③ Tsuguhito Takeuchi, *glegs-tshas*: Writing boards of Chinese scribes in Tibetan-ruled Dunhuang, University of British Columbia, August 2010.
- ④ Hiroyuki Suzuki, Restricted ergative marking in Nyagrong- Minyag, 16th

Himalayan Languages Symposium, University of London, September 2010.

- ⑤ Hiroyuki Suzuki, Copulative, existential and evidential usages of the verb *snang* in Gagatang Tibetan, 43rd International Conference on Sino- Tibetan Languages and Linguistics, Lund Universitet, October 2010.
- ⑥ Tsuguhito Takeuchi, Formation and Transformation of Old Tibetan, Himalayan Languages Symposium, 神戸市外国語大学, September 2011.
- ⑦ Hiroyuki Suzuki, Historical development of Lamdo Tibetan spoken close to the Sichuan- Yunnan boundary — a case study on the Tibetan dialectology, 第20回国際歴史言語学会、国立民族学博物館、July 2011.
- ⑧ Hiroyuki Suzuki, Similarity and difference between rGyalthag Tibetan and Cone Tibetan—How to discuss the dialectal proximity in the Tibetan dialectology, Workshop on Comparing Approaches to Measuring Linguistic Differences, Göteborg University, October 2011.
- ⑨ Ritsuko Kikusawa, Combining pattern comparison with lexical and functional reconstruction, 第20回国際歴史言語学会、国立民族学博物館、July 2011.
- ⑩ Tsuguhito Takeuchi, Various Merkmals for Dating Old Tibetan Texts - - - from extratextual to textual, Symposium: Merkmals and Mirages: Dating (Old) Tibetan Writing. (招待講演), Munich University, June 2012
- ⑪ Tsuguhito Takeuchi, Tibetan Language and Buddhism in Central Asia in the Tenth Century, Transmission of Buddhist Texts and Thought to Tibet from Neighboring Countries in the Period of the Second Diffusion. Tsukuba University, October 2012.
- ⑫ Tsuguhito Takeuchi, Various Ethnic Groups with Tibetan Personal Names in the 9th -12th c. Texts and Inscription, Central Asia Studies and Inter- Asia Research Networks: Asian Regional Sphere. (招待講演), Toyo Bunko, March 2013.
- ⑬ Hiroyuki Suzuki, 雲南迪慶・巴拉格宗藏語語音及詞彙の歴史層次, 北京藏學研討會

(招待講演), 中国西藏研究中心,
January 2013.

- ⑭ Hiroyuki Suzuki, Usage of two verb suffixes byung and byas in Gagatang Tibetan (Weixi, Yunnan), 45th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Nan' yang University, October 2012.
- ⑮ Hiroyuki Suzuki, 維西語阿話“緊元音”の語音描写, 第六屆國際彝緬語學術研討會(招待講演), 四川大學 November 2012 [図書] (計 4 件)
- ① Tsuguhito Takeuchi, B. Quessel & Yasuhiko Nagano, *Research Notes on the Zhangzhung Language by F W Thomas at the British Library*, National Museum of Ethnology, 2011, 246ps.
- ② Yoshiro Imaeda, Matthew T. Kapstein and Tsuguhito Takeuchi, *New Studies of the Old Tibetan Documents: Philology, History and Religion*. 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所, 2011, 338ps.
- ③ Tsuguhito Takeuchi, Historical Development of the Tibetan Languages. Journal of Research Institute vol. 49. Kobe City University of Foreign Studies, 2012, 161ps.
- ③ Yasuhiko Nagano, rGyalrongic Languages Database (<http://htq.minpaku.ac.jp/database/rGyalrong/>) 国立民族学博物館 2013. [産業財産権]
- 出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長野 泰彦 (NAGANO YASUHIKO)
国立民族学博物館 名誉教授
研究者番号: 50142013

(2) 研究分担者(2009-2011 年度)

武内 紹人 (TAKEUCHI TSUGUHITO)
神戸市外国語大学 外国語学部教授
研究者番号: 10171612

研究分担者(2009 年度)

池田 巧 (IKEDA TAKUMI)
京都大学 人文科学研究所 准教授
研究者番号: 90259250

研究分担者(2011 年度)

菊澤 律子 (KIKUSAWA RITSUKO)
国立民族学博物館 民族文化研究部
准教授
研究者番号: 90272616

(3) 連携研究者(2010-2011 年度)

池田 巧 (IKEDA TAKUMI)
京都大学 人文科学研究所 准教授
研究者番号: 90259250

連携研究者(2009-2010 年度)

菊澤 律子 (KIKUSAWA RITSUKO)
国立民族学博物館 民族文化研究部
准教授
研究者番号: 90272616

連携研究者(2009-2011 年度)

白井 聡子 (SHIRAI SATOKO)
名古屋工業大学 留学生センター
准教授
研究者番号: 70372555